

審 査 結 果 要 旨

研 究 科 文学研究科

専 攻 英語英文学専攻

氏 名 大山 廉

1. 学位論文題目

The Effects of Affective Processing on Second Language Development





.....

.....

.....

2. 学位論文の審査

審 査 委 員

	職 名	氏 名	
主 査	<u>教授</u>	<u>村野井 仁</u>	
副 査	<u>教授</u>	<u>ロング クリストファー</u>	
副 査	<u>教授</u>	<u>中西 弘</u>	
副 査	<u>教授 (静岡大学)</u>	<u>白畑 知彦</u>	

審査結果要旨

本論文は第二言語指導効果に関する実証的研究の結果を報告したものである。研究の焦点は、VanPatten らによって 1990 年代から盛んに研究が積み重ねられているインプット処理(input processing)及び処理指導(processing instruction)に当てられている。従来の処理指導においては、意味と形式の結びつきに関わる処理方略を活性化することに重点が置かれてはいるもののインプット内容に学習者がどのような心理的価値判断をするのかという情意(affect)の問題については調査されてきていないことに着目し、申請者は本研究においてインプット処理における情意処理(affective processing)を活性化する指導(介入)を第二言語習得モデルに基づいて構築し、その指導が日本人英語学習者の第二言語発達に与える効果について検証を行った。情意処理を活性化する指導を開発するために基盤としたモデルは、Sharwood Smith and Truscott (2014)が第二言語発達及び使用を説明するために提案した Modular Online Growth and Use of Language (MOGUL)である。MOGUL では情意モジュールは知覚モジュール及び概念モジュールを経由して言語モジュールを活性化すると想定されていることに基づき、申請者は学習者の情意処理を活性化することによって言語習得を促すことをねらった指導、情意的インプット強化(Affective Input Enhancement)を本論文において提案した。

情意的インプット強化の効果は、明示的な形式指導を行う概念的インプット強化(Conceptual Input Enhancement)及び文字情報の卓越性を高める知覚的インプット強化(Perceptual Input Enhancement)の 2 つの対照的指導の効果と比較しながら、英語を外国語として学ぶ日本人英語学習者を実験参加者とし、事前事後テスト法によって検証した。3 つの異なる指導を独立変数とし、3 回のテスト(事前テスト、直後事後テスト及び遅延事後テスト)を従属変数として、指導の効果を推計統計及び効果量(effect size)を用いて分析した。加えて、テストデータの質的分析も行っている。これらの分析結果から、情意的インプット強化が題材内容のより深い理解を促すだけでなく、語彙・文法の習得を促す上で 2 つの対照的指導とほぼ同等の正の効果を持つことが明らかになった。インプットの題材内容に関する学習者の情意的処理を指導によって促すことにより、他の情報・知識の活性化へと拡散し、情報処理の効率が高まるとともに、言語形式に対する気づきが促され、その結果、言語知識が長期記憶として定着する可能性を支持する結果が得られたと申請者は論じている。

本論文は 9 つの章によって構成されている。第 1 章において、本研究を行うに至った背景と研究の焦点(情意処理と第二言語習得の認知過程の関わり)について論じた後、

第2章では、第二言語のインプット処理に関する先行研究に基づき第二言語発達に関わる基本的な認知過程とそれに影響を与える要因について概観している。インプット処理及び処理指導に関する包括的な文献研究を行い、第二言語学習者の情意的要因がインプット処理に及ぼす影響について、理論的枠組みに基づいた説明・実証は未だ十分になされていないことを指摘している。

第3章では、第二言語発達における指導の役割や効果、既存の指導方法の限界などについて論じている。従来のインプット処理指導は限られた言語形式にしか応用することができず、社会文化的・生態学的な視点が欠如しているという問題を抱えていることを指摘している。

第4章では、本研究の理論的枠組みである MOGUL について概観し、それを言語指導へ応用する手順について説明している。情意の最も基本的な機能は、本能や自己概念、過去の経験などに照らし合わせて外界からの刺激に対して正または負の価値付けを行うことであり、これは学習者を社会文化的・生態学的に捉える見方とも整合性があると申請者は主張している。その上で本章において情意処理を高めるための指導として情意的インプット強化を提案している。

第5章では、情意が人間の記憶に与える効果を第二言語習得研究以外の分野の研究結果から特定し、それらを MOGUL の観点から再解釈し、第二言語発達へ応用することの可能性について論じている。心理学や脳科学などの研究結果から、情意が記憶や学習に対して (1) 活性化拡散効果、(2) 記憶への定着促進効果、(3) 注意誘導効果の3つの効果をもたらし、これらの効果が、第二言語学習においても複合的に働き、第二言語発達を促進する可能性を論じている。心理学や脳科学の知見に基づいて第二言語指導の効果を予測しようとする試みである。

第6章では、本研究の目標言語項目である英語の前置詞の目的語位置における関係代名詞(the-object-of-a-preposition-type relative clause) (OPREP 関係代名詞) 及び仮定法過去についてその言語的特徴について論じている。

第7章においては、本研究の研究課題や仮説、研究方法等が説明されている。情意的インプット強化が第二言語発達に与える効果を調べるために、日本人大学生を実験参加者として、以下の3つのグループを設定したことが記されている：情意的インプット強化群(インプット教材を読解する前にインプット内容に対する正の情意処理を高める指導を受ける)、知覚的インプット強化群(インプット教材を読解する前にインプットに含まれる目標言語項目に下線や色を付ける指導を受ける)、概念的インプット強化群(イ

ンプット教材を読解する前にインプットに含まれる語彙や文法に関する明示的知識を活性化させる指導を受ける)。指導の効果は、学習者の情意処理を測定するアンケート、インプット内容の理解度テスト（多肢選択法、筆記再生法）、語彙テスト、筆記文法テスト、口頭文法テストによって測定したことが報告されている。

第8章には、主な分析結果が報告されている：①情意的インプット強化群は知覚的インプット強化群と概念的インプット強化群よりもインプット内容をより肯定的に評価した。②情意的インプット強化群は知覚的インプット強化群と概念的インプット強化群よりもインプット内容の深い理解を促進した。③情意的インプット強化群の語彙テストの成績が事前テストから直後・遅延事後テストにかけて伸びた。④情意的インプット強化と知覚的インプット強化、概念的インプット強化は語彙習得に関して同等の効果をもたらした。⑤情意的インプット強化群の文法テストの得点が事前テストから直後・遅延事後テストにかけて伸びた。⑥情意的インプット強化と知覚的インプット強化、概念的インプット強化は文法習得に関して同等の効果をもたらした。

第9章では、情意の3つの効果（活性化拡散効果、記憶への定着促進効果、注意誘導効果）の観点から分析結果について考察している。事後分析として情意的インプット強化群の実験参加者の記述データに関する質的研究も行い、情意的インプット強化群の実験参加者は情意処理だけではなく、自己概念の処理も同時に活性化されていたことを示すデータが得られたと報告している。以上の結果から、情意的インプット強化は一定の条件において第二言語発達を促す上で効果的であると申請者は結論づけている。

本論文において申請者は、従来の処理指導の問題点を洗い出し、統合的な言語処理モデルである MOGUL を基盤とすることによって理論的な裏付けを持って情意インプット処理という独自の指導を提案している。従来のインプット処理に関する第二言語習得研究においては、言語形式と意味のつながりが重視されてきているが、学習者にとって何が意味あるものであり、何が価値あるものであるかという根本的な問題について論じられることがなかったことを考えると、情意の観点からインプットの内容と学習者の言語処理を捉え直し、加えて教室において実践可能なインプット処理指導を構築した点は独創性が高い。応用言語学理論及び心理学理論に基づいて指導の効果を予測し、その効果をデータに基づいて検証することをめざす「指導に基づく第二言語習得研究」(instructed second language acquisition studies)の一つとして意義ある研究であると認められる。

本研究で試みられた情意の視点から第二言語習得の認知過程をみることは、従来の第

二言語習得への認知的アプローチが抱える課題について一つの対応を試みたと考えることができる。認知的アプローチの中心となるインプット、インタラクションからアウトプットに繋がる一連の認知プロセスをモデル化したいわゆる IIO モデル (Input-Interaction-Output Model) に対しては、社会文化理論に基づく第二言語研究者達から、学習者と社会的要因の関わりを十分に考慮していないという批判が近年重ねられている (Block, 2003 他)。本研究が行った情意の観点からインプット処理指導を構築するという試みは、認知的アプローチに社会文化的アプローチを融合させる新たな試みであり、学習者を無機的な情報処理装置ではなく主体性を持った社会的存在として扱うべきであると主張する社会文化的アプローチを採る第二言語研究者達の主張と合致するものと考えることができる。本研究では重心が認知的アプローチに置かれているため、近年急速な発展を見せている社会文化理論、例えばダイナミック・アセスメント、主体性、アフォーダンス等の知見が十分に本研究に応用されてはいない。今後の研究課題とすべきであろう。

学習者の個人差に対する調査も今後進めていくべき課題である。学習者の学習動機、性格、適性等の個人差要因については第二言語習得研究において研究が進められているため、それらの知見を活かして指導効果と個人差の相互作用を今後調べていく必要がある。

指導効果の検証においては教室環境における準実験研究(quasi-experimental study)として適切な手順で実験計画が組まれ、実施・分析されている。特に文法習得への効果を見るために口頭での文法テストを実施した点は、妥当性の観点から高く評価される。実験実施上の制約により、口答文法テストに関しては遅延事後テスト(delayed post-test)が行われなかったのは改善すべき点である。分散分析等の推計統計に加えて、サンプル数に大きな影響を受けない効果量による検証も並行して行っており、Norris and Ortega (2000)らが提唱する第二言語指導効果研究(effect-of-L2-instruction studies)の指針に沿って研究が行われている。

今後追求していくべき課題はあるものの、本論文が第二言語習得研究及び英語教育学の発展のために価値を持つものであり、博士論文として十分な質を有していると評価することができる。

3. 最終試験の結果の要旨

2020年2月8日（土）15時から17時まで東北学院大学において主査及び3名の副査による最終試験（口述試験）を行った。審査委員からは、本論文の理論的背景、実証的研究の妥当性等について様々な質問及び意見が出された。申請者は全ての質問に対して、自分の考え及び解釈を示しながら的確に応答した。口述試験の後、主査及び副査全員で本論文の学術的意義、研究課題の独創性、研究方法の適切性、論文の論理的一貫性及び口頭試問における対応の適切性の観点から総合的な評価を行い、最終試験合格との結論に至った。

以上のことから、博士（文学）の学位を授与するのに適当であると判断した。